

座長／中部大学生命健康科学部／馬場礼三
／札幌医科大学整形外科／山下敏彦

子どもの健全な成長・発達のためには運動は必須である。小児の運動は肥満およびそれに伴うメタボリック症候群の予防や治療、骨密度の増加など、多くの利点を有している。これは、心疾患や腎疾患などの小児内科的疾患、二分脊椎や小児股関節疾患などの整形外科的疾患を有する児においても同様である。しかしながら、これらの基礎疾患を有する児においてはスポーツの参加において特別な配慮が必要となることがある。本シンポジウムでは、内科的・小児科的見地と整形外科的見地から、疾患や障害を持つ子どもにおける運動・スポーツの実態や、医学的にみた効果や問題点に関して討論した。尚、本シンポジウムは、吉矢会長のご高配により、日本臨床スポーツ医学会と日本小児整形外科学会との合同シンポジウムとして企画・実施された。

上村 治先生（日本赤十字豊田看護大学）は、小児の慢性腎臓病（CKD）における運動制限の要否に関して口演した。安静・運動制限の必要性に関する根拠は乏しく、むしろ精神的・身体的影響に鑑み運動を制限すべきではないと述べた。また、小児医療施設から成人医療施設への移行支援の重要性を指摘した。

原 光彦先生（東京家政学院大学）は、小児肥満に対する運動の有効性について口演した。適切な運動は子どもの肥満予防や体力の維持増強に必須であり、子どもたちに運動の楽しさ・大切さを体験・理解させることが必要であると述べた。

馬場礼三先生（中部大学）は、小児心疾患患者における運動の可否や問題点に関して口演した。心疾患患児においても、体育などを全て禁止するのではなく、可能な範囲で参加を許可すべきであり、そのためには主治医と学校間の密接な連携、正確な情報共有が必須であることを強調した。

藤田裕樹先生（北海道立子ども総合医療・療育センター）は、二分脊椎患児のスポーツ活動の現状と問題点について口演した。スポーツ活動に興味のある患児が多い一方、実際に参加している者が少ない状況にあり、今後、麻痺の程度を考慮したスポーツ環境の整備が必要であることを述べた。

柿崎 潤先生（千葉県こども病院）は、大腿骨頭すべり症患児の術前術後におけるスポーツ活動について口演した。術後のスポーツ復帰までは数年を要したが、最近では術式の改善により90%以上が復帰していることを報告した。

いずれのシンポジストも異口同音に、子どもの疾患・障害に対しても適切な運動を行うことは有用であり、その安全な遂行のためには、医療者と学校の指導者・保護者との意思疎通、情報共有が重要であることを強調した。本年度より、学校検診に従来の内科的検診に加え、運動器検診も導入されることも踏まえ、今後は、小児の医療・療育においては小児科医と整形外科医の連携がますます重要になると思われ、本シンポジウムのような共同での討論はきわめて有意義であると思われた。